

『万葉集』研究の基礎

日吉盛幸

一 『万葉集』を知る基本的要件

多くの日本古典文学作品において、その成立の時期がとりわけ古く、従ってその研究の歴史も一番長いと思われる『万葉集』を、限られた時間的制約の中で、はじめて演習(研究)の対象とするにはどのような点に注意すれば、より良い成果を上げることができるのでしょうか。ここ数年授業で実践してきた経験を踏まえて、できるだけ総合的に、かつ具体的に、その基本的要件について述べたいと思います。

まず、『万葉集』についての次の

- 1 編纂・成立と書名・名義
- 2 時代区分(代表歌人と作者未詳歌群・東歌・防人歌)と年号(干支・皇紀・西暦)
- 3 各巻概要(巻数・歌数と分類・歌体)
- 4 用字法と語法(真名・仮名とク語法・ミ語法・ズハ)
- 5 音韻(母音の交替・上代特殊仮名遣い・字余りの法則)
- 6 諸(古写伝)本と系統(仙覚本・非仙覚本と校訂本)
- 7 皇室系図・大伴氏・藤原氏系図と官制組織・官位相当表
- 8 古代国名と万葉地図(五畿七道と遣外使コース)
- 9 万葉の動・植物と修辞・色彩

- 10 補助史料の活用(『古事記』、『日本書紀』、『続日本紀』、『風土記』、『古辞書類』、『漢籍』)
11 研究文献(校本・注釈書・研究書・索引・年表・万葉事典・『時代別国語大辞典上代編』)

1～11の項目の内容把握が、この演習に臨むにあたっての基本的な予備知識であり、また必要条件ともなります。今、紙幅の都合で重要と思われるものに限って説明しますと、1、2、3で、『万葉集』は、2のとき個々の作歌に対する約四八〇名もの歌人はいても、二〇巻四五〇〇余首の成立に関する作者など存在しないということですから、中古以降の勅撰・私撰集でも一〇〇年以上にも及ぶ、集大成としての編纂物は存在しません。つまり、一つの明確な編纂意識をもって一時期に成立したものではないということの意味しているのです。この点をよりわかり易くするために、次節では、個別の代表歌人を中心に、歴史事項と併用させた時代区分を年表形式で簡潔に表してみます。後期授業では、これらの歌人や作品などを学生自身が演習形式で発表してもらうこととなります。

次に4で、『万葉集』が属する、いわゆる上代の文学は、記載された作品の文字表記がすべて漢字であるということです。漢字は、もともと外国語で、しかも孤立語である中国語を表記するために造られた文字ですから、常に助詞・助動詞や活用語尾などを含む日本語(膠着語)を表記するためには、初めから多くの困難をとまいます。よく『万葉集』はすべて万葉仮名で書かれている日本最古の歌集で云々、などと解説されますが、厳密にいうとあまり学問的ではありません。なぜならば、『万葉集』の中には漢詩・漢文もあるのですが、このことを除外しても五・七・五・七・七の短歌形式の中には一文字も万葉仮名を使用していない和歌もあるからです。

最後に5で、要件の中でも最も重要なのが、いわゆる「上代特殊仮名遣い」の基礎知識です。日本の上代では母音が*a i u e o*の他に*i ē ō*という中舌母音が存在し、八つであったといえます。このことは、すでに江戸時代から仮名遣いの違いとして気づいていたのです。11の『時代別国語大辞典上代編』(三省堂)の見出し語は「キ・ヒ・ミ・ケ・ヘ・メ・コ・ソ・ト・ノ・モ・ヨ・ロ」の一三音節とその濁音を含む語彙の音節の違いを区別して掲載しています。また、「字余り」についても句中に単独の母音音節*a・i・u・o*が含まれていると字余りになることも江戸時代に発見しているのですが、これらを無視して万葉歌を訓み積くことは決してできないのです。

二 時代区分（四期区分説）と歌人*

『万葉集』二〇巻に収載されている最も古い歌は、次の年表欄外Aの¹⁶代仁徳天皇を思いやった磐姫皇后の作（巻85～90*）で、最も新しい歌は、Fの天平宝字三（759）年正月元日、因幡の国庁での大伴家持作（巻4516）です。『東方年表』（1955-2003平樂寺書店）などの一般に流布している西暦対照によれば、その間は約四五〇年ですが、最新の訂正紀年（干支二巡説）によれば約三三〇年となります。前後約三世紀にも及ぶいわゆる万葉歌風をたどるには、代表歌人の活動時期、作品の背景となる政治的社会的な歴史事項を基準とする四期区分が最も理解し易いでしょう。

和銅五（712）年に成立した『古事記』は、上巻（神代）、中巻（神武、応神）、下巻（仁徳、推古）の三巻ですが、この下巻と重複する時代A～Bは萌芽期（五味智英説）とも呼ばれ、歌も少なく伝承に基づいて、後人が仮託したものとみなされています。従って、実質的にはBの34代舒明天皇あたりからの約一三〇年間ということになります。この約一三〇年間に前後に二分するのがDの奈良遷都です。前半B～Cが有間皇子、天智天皇、額田王、鏡女王などの第一期（萌芽期と合わせて初期）、C～Dまでが持統天皇、柿本人麻呂、志貴皇子、長意吉麻呂らが活躍した第二期です。後半は、山上憶良の死没を区切りとする天平五年のEで、D～Eまでが第三期、憶良のほか大伴旅人、山部赤人、高橋虫麻呂、笠金村など個性あふれる歌人たちがいます。続くE～Fの第四期は、東大寺の造営、大仏の開眼などもあり、絢爛とした天平文化が開花した時代で、大伴坂上郎女、大伴家持、大伴池主、笠女郎、狭野茅上娘子らがいます。ただし、たとえば、第二期の人麻呂と第三期の憶良は、年齢が近い関係にあります。が、人麻呂は若き時代に、憶良は老年になってというように、それぞれの歌人の最も活躍した区分けであることも留意する必要があります。加えて、Fは年代の明確な最後の歌が天平宝字三年であって、F～Gの時代の歌が作者未詳歌巻に全く含まれていないとは断言できません。

因みに、養老二（718）年に誕生し、原『万葉集』に巻一六以降の四巻を加え、最終の編纂にかかわったと目される大伴家持が死没したのは、Fから二十数年後の延暦四（785）年のことです。

時代区分年表 (基礎演習用)

西暦	天皇	年号	万葉歌と歴史事項
284	応神	15	阿直伎来朝。漢字伝来。(名) 16 王仁来朝
313	仁徳	1	難波高津宮(御宇天皇)に即位。②八五〇九
435	允恭	1	輕太子伊予の湯に配流の時衣通王の歌②九〇
443	雄略	1	隅田八幡宮蔵の人物画像鏡銘
455	雄略	1	泊瀬朝倉宮(御宇天皇)に即位。①
471	471	?	熊本県江田船山古墳出土大刀銘
478	478	?	埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘。(獲加多支鹵)
393	推古	1	倭王武、宋に遣使、奉献上表す。
396	推古	1	聖德太子、撰政となる。憲法十七条制定。
613	推古	21	伊豫国道後温泉碑
629	舒明	2	高市岡本宮(御宇天皇)に遷る。①二
639	舒明	11	讃岐国安益郡に行幸の時、軍王の歌①五〇六
644	皇極	3	宇智野に遊獵の時、中皇命の献歌①三〇四
645	皇極	1	額田王の歌①七。
646	皇極	1	大化改新。難波長柄豊碕宮に遷る。
649	皇極	2	道登、宇治橋断碑
659	皇極	2	野中川原史満の造媛の死を悼む歌(書紀)。
655	皇極	1	飛鳥板蓋宮焼け、飛鳥川原宮に遷る。
658	皇極	4	有間皇子、藤白坂に絞せらる。②一四一〇二
661	皇極	7	額田王、熱田津の歌①八
667	皇極	6	中大兄の三山歌①一三五五
668	皇極	7	近江大津宮(御宇天皇)に遷都。①一七〇八
668	皇極	7	法隆寺金堂薬師仏光背銘(或いは67年)
672	弘文	1	壬申の乱起る。⑩四二六〇一
673	弘文	2	大海人皇子、飛鳥浄御原宮(御宇天皇)に即位
680	弘文	10	庚辰年七夕の歌⑩二〇三三(或いは45年)
681	弘文	10	川島・忍壁皇子らに帝紀・上古諸事撰録さす。
682	弘文	11	上野国山名村碑
686	弘文	11	新字一部四十四卷を作らす。
689	弘文	3	大津皇子、謀反の嫌疑で賜死。③四一六
691	弘文	5	日並皇子の殯宮の時、人麿歌②一六七〇九
691	弘文	5	大嘗祭。中臣大嶋、天神寿詞を読む。
694	弘文	8	藤原宮(御宇天皇)に遷都。①五〇〇(大書体)
697	弘文	11	飛鳥池遺跡出土木簡。宣命一詔(宣命小書体)
700	弘文	4	那須国造碑建立
701	弘文	1	憶良、遣唐少録となる。大宝律令。②一四六
708	弘文	1	元年戊申天皇御歌①七六

D

C

B

A

710	元明	和銅3	平城京(寧樂宮)に遷都す。①七九
711		和銅4	多胡碑建立。法隆寺五重塔「奈尔波都」落書
712		和銅5	大安万侶、古事記を撰上す。①八一〜三
713		和銅6	諸國に風土記を撰上せしむ。①三三九
716	元正	靈龜2	志貴皇子没。②三三〇〜二。
718		養老2	養老律令を撰進。家持誕生(大伴系図)。
720		養老4	舍人親王ら、日本書紀三十卷を撰上。
721		養老5	下総国葛飾郡大嶋郷戸籍。憶良、東宮侍講。
723		養老7	菅陸国風土記成る。笠金村の歌⑥九〇七〜九
724	聖武	神龜1	元正天皇讓位し、首親王即位。吉野宮に行幸。
728		神龜5	山部赤人の歌⑤五一七〜九
728		神龜6	長屋王賜死後、倉橋部女王の歌③四四一
730		天平2	曲水詩を賦す。梅花の宴の歌⑤八一五〜四六
731		天平3	宸翰雜集成る。旅人没。③四五四〜八
732		天平4	宇合任命時の高橋虫麻呂の歌④九七一〜二
733		天平5	出雲国風土記成る。沈痾自哀文⑤憶良没か。
735		天平7	坂上郎女の挽歌③四六〇〜一
736		天平8	遺新羅使人らの歌⑤三五七八〜三七二
737		天平9	大倭國を大養徳國と改む。七夕の歌⑨一七六四
738		天平10	梅樹を詠ずる詩を賦す。家持、天漢の歌⑩
746		天平18	家持、越中守となる。③三九二〜三〇
747		天平19	二上山、布勢遊覽、立山の賦。⑦三九八〜五
749	孝謙	感徳宝1	陸奥國より黄金を献上す。⑧四〇九四〜七
750		勝宝2	正倉院文書の漢詩・和歌の落書
751		勝宝3	大伴家持、少納言となる。懷風藻成る。
752		勝宝4	東大寺大仏開眼供養を行う。
753		勝宝5	文室智努、仏足石及び歌碑を造立。
755		勝宝7	東大寺に戒壇院を建つ。諸国防人歌⑫90首
757		宝字1	養老律令を施行す。橘奈良麻呂の姿
759	淳仁	宝字3	万葉集最後の歌。⑩四五一六
764	称徳	宝字8	天皇廃せられ、孝謙上皇重祚(称徳天皇)。
771	光仁	宝龜2	武蔵國を東海道に屬せしむ。万葉集の編纂成る
772		宝龜3	浜成、歌經標式を撰上。
779		宝龜10	三船、唐大和上東征伝を撰す。
783	桓武	延暦2	大伴家持、中納言となる。
784		延暦3	長岡京に遷都。
785		延暦4	家持没68。後、種継暗殺に連坐し、除名。
789		延暦8	高橋氏文成る。
794		延暦13	平安京に遷都。万葉集の最終編纂成るか。統紀
806	平城	大同1	皇太子安殿親王即位。
807		大同2	古語拾遺成る。

D E F G

三 校訂* と訓釈 中大兄の三山歌を例として

古典文学作品は、原本とか自筆本など存在すること自体が稀です。『万葉集』でいえば、みなさんが今までに触れてきた本文は、諸々の古写伝本をもとにある校訂(注)者によって整理・確定化されたもの、しかも原文ではなく訓み下し文です。ですから、たとえ同じ底本* を使用し校訂した本文であっても、校訂者が異なれば同じではなく、訓み下し文の表記に至っては、なお一層その違いが顕著であることを知っておく必要があります。校異* に基づいたところの校訂は、本文解釈に深くかわるのですが、ここでその実例の一端に触れてみましょう。

中大兄 近江宮御
宇天皇 三山歌一首*

13 高山波 雲根火雄男志等 耳梨與 相諍競伎 神代從 如此今有良之 古昔母 然今有許曾 虚蟬毛

孀乎 相格* 良思吉

反歌

14 高山与 耳梨山与 相之時 立見今来之 伊奈美國波良

15 渡津海乃 豊旗雲今 伊理比沙之 今夜乃月夜 清明己曾

右一首歌 今案不似反歌也 但舊本以此歌載於反歌 故今猶載此次 亦紀曰 天豊財重日足姫天皇先四年乙巳立天皇為皇太子*

〔沙〕底本「祢」。細

右の13、15番歌は、卷一雜歌の後 右の13、15番歌は、卷一雜歌の後 岡本宮御宇天皇代(齊明天皇の御代)の標目下に収載された「中大兄の三山歌一首」と題された長・反歌一組を、『校訂万葉集』(1995角川書店)に拠って* 示したものです。

まず、脚注に示した校異は、15番歌の第三句目の「沙」は諸本に異同があつて、底本の西本願寺本では「祢」とあるのを細井本によって「沙」に改めたという意味です。つまり「入り日射し」を想定しての校訂ですが、次点本

から新点本へ*と年代順に古写伝本と主な現行諸(説)本との関係をまとめると次のようになります。

- a 弥(彙)之(さし)……元暦校本、類聚古集、冷泉本……『全註釋』『旧大系』『新全集』『和歌大系』(1976)
- b 祢之(子シ)……金沢文庫本、西本願寺本、温故堂本、大矢本、京都大学本、広瀬本……
- c 佐之(サシ)……紀州本(神田本)、『秘府本萬葉集抄』……
- d 沙之(サシ)……細井本、神宮文庫本、寛永版本……『校訂』『全訳注』『新大系』(1999.5)
- e 紗之(サシ)……『注釋』(意改1957.11)『埴』『おつぶつ』『旧全集』『集成』『釋注』(1995.11)

現在、原文・古訓ともに伝本を論拠とするd「射し」説と、a c dの古訓「サシ」の方が原形を正しく伝え、「沙」は「紗」であると意改したe「射し」誤字説と、a bの原文「弥(彙)・祢」は本来「弥」で、その古訓「ネシ」「サシ」を誤読とし、正しくは「ミシ」「見し」説(説)であるとすると三つの説に分かれています。すなわち、『新全集』は『旧全集』(971)の澤瀉『注釋』誤字説であったのを改訂して、その頭注で

見シの原文は神宮文庫本など「沙之」とあるが、それは中古の自由な読み方に合わせた捏造本文で、元暦校本などに「弥之」とあるのによる。(小島憲之・木下正俊他『新編日本古典文学全集萬葉集』1949小学館)

とした「見し」説に対して、『新大系』(998)が、脚注で

「入り日さし」説に従う(佐佐木隆「万葉集の「豊旗雲」に入り日見し」存疑『上代語の構文と表記』)。

と主張しているのに代表されます。今、学説の可否の論証は置いて、『全註釋』の

一、傳來の性格、二、一首全體の調和の二點から觀察しなければならぬ。そこで傳來の性格としては、元曆校本と類聚古集とが一致して弥之としてゐることは、相當尊重されねばならない。これに射して、神田本が佐之、細井本が沙之に作つて、よし訓は同一でも、字面がそれぞれに相違する孤立的の傳來であることは、傳來の性格において弥之に譲るものとすべきである。(武田祐吉『増訂萬葉集全註釋三』199.7角川書店)

とする判断を「新奇を競つて輕薄の浮説を立てることは、もつとも慎むべきである」* という研究に臨むにあつての、初学者への氏の一つの教訓として紹介します。

さて、次に同一校注者による訓釈(訓み下し文・注釈)を見ますと、

中大兄なかつおほえ(近江宮に天の下知らしめしし天皇)の三山みつみやまの歌一首

13' 香具山かぐやまは 畝火うねびををしと 耳梨みみなしと 相あひあらしひき 神代より かくにあるらし 古昔いにしへも 然しかにあれこそ

うつせみも 孀つまつまを あらしふらしき

反歌

14' 香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來しいなみくに印南国原

15' わたつみの豊旗雲とよはたくもに入り日射さし今夜こよひの月夜つきよさやけかりこそ

右の一首の歌は、今案かむがふるに反歌に似す。ただ、日本にこの歌を以もちて反歌に載す。故に今なほこの次に載す。また紀に曰はく、「天豊財重日足姫天皇の先の四年乙巳に、天皇を立てて皇太子となす」といへり。(中西進『万葉集全註全訳注原文付』(2001 講談社))

となります。ただし、中西氏は右のように読み下したのですが、たとえば『新大系』では13番歌を、

- 13' 香具山は 畝傍を惜しと 耳梨と 相争ひき 神代より かくにあるらし 古も 然にあれこそ うつ
なかつおほえ 中大兄 (近江宮に 宇御めたまひし 天皇) の三山の歌一首
かくやま 香具山は を 畝傍を惜しと みみなし 耳梨と あひ 相争ひき 神代より かくにあるらし いにしへ 古も 然にあれこそ うつ
 せみも 妻を 争ふらしき (佐竹昭広他『新日本古典文学大系萬葉集一』1999岩波書店)

とし、題詞もまた本文の訓みと表記も大きく異なります。ですから、もし自分自身で校訂し、読み下すのでなければ、どのような校訂本の本文によったのかを明確にすることがとても重要となるわけです。就中、原文第二句「雲根火雄男志等」は、仮名表記で音節的に「ウ子ヒヲヲシト」(西本願寺本)以外の訓みを考えることはできません。しかし、『全訳注』に「ををし」としたのは、脚注に「を愛し」(いとしい)とする説もあると異説を挙げ、また 畝火山を男らしい者の 口訳 からしても、「雄雄し」と読み下すのと同じで、その結果 香具山(女)は新に現れた畝傍山(男)に心移りして古い恋仲の耳梨山(男)と言い争いをしたと結論づけるのです。対して『新大系』は「を惜し」とするのでから両者の解釈は全く異なります。つまり、この問題は万葉仮名という表音表記が音的に読めても解釈が異なる典型で、古来多くの議論が重ねられてきたところです。次に、三山の性別と合わせて、その主な主張を挙げてみましょう

- A 雄雄し a 香具山(女) 畝傍山(男) 耳梨山(男) = 『仙覚抄』(269) ----- ↓ 『注釋』『全訳注』『新全集』
 b 香具山(女) 畝傍山(男) 耳梨山(女) = 折口『口訳』(917) ----- ↓ 『旧大系』
 B を惜し c 香具山(男) 畝傍山(女) 耳梨山(男) = 『墨繩』(841) ----- ↓ 『釋注』『新大系』
 を愛し d 香具山(男) 畝傍山(女) 耳梨山(男) = 『私考(眞潮説)』(785) ----- ↓ 『旧全集』『集成』

ここで大事なことは、文学研究は科学ですから、最初に説いた人物は尊重されなければならないこと、また今現在どうなっているのかということ*です。そして、集中内の用例(たとえば「雄」「男」の歌句漢字の用例*と用法)や他の上代文献(「雄雄し」「を愛し」「を惜し」の形容詞の用例と用法)、古辞書(『類聚名義抄』など)、あ

るいは妻争伝説などの独自調査と分析を行った上で、いずれの学説を支持するのか、支持できないのはどういう理由・根拠に基づくのかを明確に論証して、結論づけるようにしてほしいと思います。

以上、一首全体との関連や「反歌」と「左注」の問題など割愛して、校訂と訓釈のほんの一端に触れました。一般に、諸注釈書類では読者の便を図って、校訂原文・訓み下し文の次に現代語訳（口語訳）を挙げ、その後、個別に歌句単位での語釈をしています。しかし、論証の過程としては、本文整定時には語釈の論証は十分になされているのです。ですから、みなさんが『万葉集』の演習を行う際には、たとえ訓み下し文から入ったとしても、必ず原文がどのように校訂されているかを確認し、次に歌句の語釈を調査分析してから、最後に現代語訳と考察（まとめ）を發表できるように心がけてください。

* 大久間喜一郎 森敦司・針原孝之『万葉集歌人事典』2002雄山閣、中西進・辰巳正明・白吉盛幸『万葉集歌人集成』2008講談社、神野志隆光・坂本信幸『ゼミナー 万葉の歌人と作品』11-12(2008)和泉書院が有用です。

* 旧『国歌大観』松下大三郎・渡辺文雄 1903大日本図書出版、1951再版、角川書店)による歌番号(11-4516)で誤りもあるのですが、『万葉集』では研究史上の混乱を避けるため、『新編』番号(11-4540)ではなく、主として旧番号を用いています。

* 古書などの本文を、他の伝本と比べ合せ、手を入れて正すこと。(今、便宜的に敢えて『広辞苑』第五版によります。)

* 校訂作業をする際に、普通、ある特定の1伝本を拠りどころに、他の諸伝本との異同を校合して本文を決めます。この本を底本といい『万葉集』の場合、昭和四十年代半ばの『新校萬葉集』まで、江戸時代に流布した寛永版本でしたが、以後、鎌倉時代後期の完本である西本願寺(旧蔵)本が中心となっています。

* 文章の文字 語句の異同を比べ合せ調べること。また、その結果。(今、便宜的に敢えて『広辞苑』第五版によります。)

* 作歌事情を示す詞書きで一般に『万葉集』では「題詞」と呼んでいます。巻一の題詞に「一首」と歌数を明示するのは異例で、校訂者によっては元暦校本などによって本文としません(『注釋』『旧大系』『おつふつ』『埴』『釋注』など)。割注の近江宮御宇天皇(天智天皇)は巻一、二編纂ころの後人の注と思われま。

* 13番歌の結句の格々を、底本の西本願寺本の左傍に「カク」とあることから、寛永版本と同字の格」と見て、元暦校本や紀州本の格」によるべきであるとして、校異をたてるもの(『旧大系』『おつふつ』など)もあります。書写本では手偏と木偏を厳密に書き分けられないのが普通

です。因みに、「格」は説文『十二』に「婦也」、『新撰字鏡』『十』に「婦又闘也」とあり、『新編全集』頭注で、古本「玉篇」逸文には「闘、争也」とあると指摘しています。旧訓(版本)に「マラウシラシキ」としましたが、『管見』に初めて「相格」の二字で「マラウシラシキ」として以来、定説となつています。

* 「右一首歌」以下、「左注」といいます。この左注はある時期の編纂者の反歌である15番歌に対する本文批判です。この編者の個人的な賢しさを排除する姿勢は、歴史文化を伝承する上で高く評価されなければなりません。

* 歌句右傍にはカタカナによる訓点を、題詞、左注には返点送り仮名を施していますが、後に訓み下し文を掲げるので省略し、印注は私に付けています。因みに、平安時代の古点本では漢字による本文をすべて挙げたあとに、かなによる訓点を施しています。

* 村上天皇の天曆五(551)年に源順ら梨壺の五人(『後撰集』の撰者)が勅命によって初めて『万葉集』を訓み積みます。これを古点といいますが、また、鎌倉時代中期、僧仙覚が比企で従来無訓であった約一〇〇首ほどに訓を加えたのを新点といい、古点と新点との間の訓を次点といえます。

* 武田祐吉『増訂万葉集全註釋』七、研究法「六、初学者の注意」1970角川書店

* 基礎演習のレベルでは、最新の『全訳注』、『釋注』、『新全集』、『新大系』の四冊を常に参照するよつにします。ただ、『新全集』は学説の拠りどころとなる『書名や提案者の名を記さない方針なので利用の扱いに注意を要します。

* 日吉盛幸『万葉集歌句漢字総索引』上下1992桜楓社が有用です。